

# 「知恵の研究(1)」

## Study of Wisdom(1)

南 雲 功\*

Isao NAGUMO

**要旨：**知識が外から内へという対象の概念化の結果であるのに対して、知恵を概念の対象化という内から外への現実化の能力としてみた。知識は、知恵により現実化し主体の目的が達せられる。本稿では知識を獲得する目的を、プラトン、ベーコン、自然哲学者の思想より探り、理性目的、感性目的、知性目的とした。しかし、獲得した知識は没目的的である。知の目的は様々であるが、知識も知恵も一つのものであり、知の両輪である知識と知恵の循環の中で、諸目的の調和が要請されるという視点を提唱する。この視点から現代社会を見ると、デジタル化の進展により、膨大な知識が蓄えられ、知識を増大させることですべてを解決しようとする。すべて知識のみで作動する機械に任せたほうが信頼できる場面も出現している。果たして、知識の活用のみで、現代の諸問題が解決できるのだろうか。

**キーワード：**知識, 知恵, 知の目的, 専門知識, 膨大な知識

### 1. 序

科学技術の急速な進展に伴い、専門知識の細分化が進み、生活者は単に専門知識の果実を享受するだけの存在になっている。本研究では、専門と日常の対話の可能性を探ることを目的としている。

本稿で着目したのが、知識と知恵である。知識は真実であることが求められ、専門化する傾向にある。知恵は実践的な成果が求められてきた。しかも知識と知恵が人間の知的営みの両輪であることより、専門と日常の対話の活性化への足がかりになると思慮した。

### 2. 知恵と知識

#### 2.1 知の目的による三側面

知識を獲得する目的を三種類に類型した。一つは、プラトンに代表される精神的向上を目指す

---

\* なくも いさお 準研究員・日本大学法学部（通信教育部）在学

知識獲得である。第二は、ベーコンの提唱する知識は生活を向上していく実用的知識の獲得を目指すものである。第三は、真理の追究に意義をみていた自然哲学者（科学者）達である。これらの目的に対してそれぞれ、理性目的、感性目的、知性目的とした。

### 2.1.1 プラトン

プラトンは知を序列化している。『ピレポス』において「われわれの学ぶ知識（*επιστήμη*）は、職人的なもの、教育や教養にかかわるもの」（プラトン、『ピレポス』、55d）があるというのだ。つまり実用的知識と教養的な知識である。このことは、知識に貴賤を持ち込むことになる。しかし、知識は一つのものだという。『ソピステス』にて、「知識（*επιστήμη*）というものもやはり、一つのものであるはずだが、しかし、或る特定のものを対象として成立するその部分は、その一つひとつが切り離されて、それ自身に固有の特定の名前をもつことになる。そのために、多くの技術や知識が語られて存在しているわけなのだ」（プラトン、『ソピステス』、257c）。つまり、知識は一つなのだが、使う場面において多様化するということである。

この唯一の知識について『カルミデス』の中で、人間にとって「（幸福）を保証してくれるのは、……ただ一つの知、つまり、善悪についての知にしたがって生きるということだった」（プラトン、『カルミデス』、174c）と、善悪の知識こそ人としての最高にしてただ一つの知である。他の知識は、善悪の知識の派生となる。このように、プラトンの知識の最高の目的は善悪を判断する知識を身に着けるという道徳的なものである。実用的知識は専門家に任せるのであるが、そこにも、道徳的知識からの派生としての専門知識を求めていくことになる。『プロタゴラス』で「最大の悪は無知に他ならない」（プラトン、『プロタゴラス』、357e）と述べ、人が悪を働くのは「善」を知らないからであり、「悪」を働いていることが、その人にとって「善」であると誤った意識を持つこととしている。この知識は単なる道徳的知識だけでない。人命を救うために医学知識を獲得するとか、安全な機械を設計するために安全工学的知識などの研究も理性目的が含まれている。

理性と感性の関係についてプラトンは、感性による快樂はけして悪ではないが放置すると際限なく拡大しかねない。そこで理性により感性を制御しようとしている。エルラーは、プラトンの理性について、「魂には理性と意志と欲望が帰せられる。後者の二つの力は理性に支配してもらう必要」（エルラー、2006、223）があると解説している。

尚、後にアリストテレスが知を分類（アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、1139b；南雲、2017a）したのに対しプラトンは知に関する語を混用している例が多数ある。（藤沢、1978、知識の項など）

### 2.1.2 ベーコンの知識

ベーコンは学問の目的を、人類の生活を向上させることにあり、自然に対する人間の支配力の拡大とした。その為には、自然の法則を明らかにするのである。そこでベーコンはギリシア哲学と錬金術を批判する。ベーコンは、「この種の人々が、哲学および全般的な考察に立ち向うときには、これらを最初の空想によって、歪め駄目にするのであって、このことはアリストテレスにおいて、最も明瞭であると考えられる。すなわち彼は彼の自然哲学をば、全く彼の論理学の手に委ね、その結果それをほとんど役に立たぬ、理屈沢山なものにしてしまったのである」（ベーコン、1978、p.93）という。

つまり、実証を伴わない学問は、意味がないというのである。しかも、経験だけによる学問も批判している。経験は、常に吟味されなければならない。このための新たな道具として、「新機

関（ノバム・オルガヌス」を提唱するのである。

この点について村田は「ベーコンは知識論の問いを根本的に変更したと見ることができる。『どのようにしたら知識を正当化できるか』ではなく『どのようにしたら知識を改良できるか』これがベーコンの掲げる知識論の根本問題なのである」（村田純一、2009、p.64）と述べている。理想より実用性を重視する知識のあり方を求めたものである。さらに、知識は有用性だけでなく、一般化され、さらに社会的に組織されなければならないという。村田は、「伝統的な職人の知識に関して、職人たちがもっぱら有用性のみ注目してきたため、一般的な知識を獲得できず、知識はいつまでたっても相互に関連づけられず、累積されず、進歩することがないままであったことを指摘している」（村田純一、2009、p.66）。さらに、「知識の営みが個人的な才能によるものではなく、社会的に組織された共同作業によるものだという見方である」（村田純一、2009、p.69）と述べ、ベーコンが社会的共同作業により知識を拡大し実用に供しようとしたと解説している。プラトンが、実用的知識を道徳的知識の派生として、理性的な知を希求することを目的としたのに対し、ベーコンは実用的な知識から普遍的な知識を求め、そこから実用的応用を求めている。実用と普遍的知識の関係が目的の違いにより異なっている。

このような知識観は理性や知性よりも感性を重視する立場である。ベーコンは「人間の知性のこの上もない最大の障害と錯誤とは、感覚の鈍さと無能と虚偽とから生じ、その結果感覚を打つものは、たとえ有力ではあっても、感覚を直接動かさないものに比べて、より重きをなすようになる」（ベーコン、1620、p.91）とも述べている。真理を探究し発見するには「感覚および個々のものから一般命題を引き出し、絶えず暫時的に上昇して、最後に最も普遍的なものに到達する、この道は真の道ではあるが未だ試みられていない」（ベーコン、1978、p.75）と述べ、理性の暴走を研ぎ澄まされた感性による継続的批判により抑えようとしたとものである。プラトンとは逆に感性を重視する立場で理性と感性の調和を求めたとも言える。現代における感性目的の主な主題は、経済的豊かさを目的とするものでもあり、ベーコンの求めた知識目的である。

### 2.1.3 近代科学初期の知識観

コペルニクス、ガリレオ、ケプラー、ニュートンらのいわゆる科学革命の担い手達の研究目的には、ベーコン的な実用的進歩の為の科学研究という視点が希薄であり、宗教的色彩が色濃く残っている。そこに知識の為の知識に重要な意義を見出していたのである。

コペルニクスは『天体の回転について』の序文で「哲学者の仕事は神が人間の理性に許し給うた範囲においてあらゆる事物について真理を探求することである」（コペルニクス、1953、p.13）と述べているように、研究目的は真理の探究であり、自然哲学者の使命だというのである。尚、当時地動説の実用的要請はほとんどなく、また実用に供されることもなかったのである。

ケプラーも『宇宙の調和』の献辞の中で「自然の直観は惑星運動の中に調和があることを示唆していました。……実際、人間の生活のあらゆる旋律を調整する神が存在するというのは、キリスト者にふさわしい確信でした」（ケプラー、2009、p.7）と述べているように、研究目的は日常の不協和音から、神の意志である調和を理解する宗教的目的であり、知識の実用利用への意識は稀薄である。

同様にガリレイも「自然の書物に読まれることはいずれも、全能な造物主のつくられたものであって非常によく均整のとれたものではありませんが、それでもやはり、造物主の仕事と仕業とをわれわれにいっそう偉大なものとして示すものはいっそう完全で価値あるものなのです」（ガリレイ、1959、p.11）と述べているように、科学的知識を獲得することが、神の偉大さを知ること

であり、正しい知識の獲得が正しい宗教的態度ということになる。ここには、実用的目的は稀薄であり、知識の獲得そのものが宗教的信仰に合致するという考えである。

ニュートンも、『プリンキピア』の序文で（斥力や引力など）「のような力がまだ知られていないために、哲学者たちはこれまでむなしく自然を追求してきたのではないかと想像させられるからです。そしてここに提出された諸原理が、あるいはこの哲学する方法について、あるいはより真実に近い何かに対して、なんらかの光明を与えることを望むものです」（ニュートン、1971、p.57）と問題の意識が真理の究明にあり、実用的志向が表れていないのである。

以上、科学革命期の科学者は、知識拡大の主な目的は、知識獲得そのものが目的である。複雑な自然現象から純粋なものを分離し、そこに神の意志である自然法則を理解しようとしているのである。彼らの理論が、実用に供するには時代の要請が伴っていないとも言えるが、将来の実用化に向けた基礎研究という現代における科学の目的意識も芽生えるには、時期尚早だったともいえるだろう。ここにもプラトンと同様に日常の知識と異なる高尚な知識探求という意識が現れている。

現代においても天文学や、理論物理学など基礎部門の科学者の多くが、知識拡大の目的を主張している。すぐに役に立ちそうもない知識であるが、科学の体系と正当性の根拠づけとして無視できない分野を担当していることは科学史の証明するところである。さらに人間存在の意義を考える上で、宗教的意義が減少している現代において重要な地位を占めている。

#### 2.1.4 知識の本質としての没目的性

以上のように知識獲得の目的を分類したが、実際に知識が使用される場面においては、知識の履歴は問わない。何らかの目的により獲得した知識も、知識の汎用性と伝達性により、活用する人間の多様な目的に使われるのであり知識そのものには目的がない。このことにより知識の価値は真偽であり、善悪は知識には内在していない。このことにより知識の獲得段階では、知識の倫理性を問うことはできない。知の善悪が判断されるのは、使用の意志や使用の結果である。ここで知識の使用を知恵の働きとしてみよう。日常的な知恵から倫理的な知恵までが、知恵の中に包括される

### 2.2 知恵について

本稿では、知恵を知識の実践的活用と定義する。知恵の目的は多様に変化していく環境に対応する主体の行為とした知識を主観的に活用していく知的活動である。知恵は概念でもなく、感性、悟性といった認識能力でもない。主体の外界への働きかけであり、概念の現実化という認識能力とは逆の作用的能力である。

#### 2.2.1 知識と知恵の関係

知恵は知識の使用であり、知恵の発揮が新たな知識となる。こうして、知恵と知識が循環する。知識は経験と教育により増やすことができるが、知恵は教育により増やすことはできない。新たな状況での知識の実使用という経験の積み重ねによってのみ、知恵の能力を強化できる。知識の実使用である知恵を発揮するためには知識が多い方が有利である。しかし、多量の知識だけでは多様な状況の変化には対応できない。多様な状況に対応するには、人間のもつ知識では少なすぎるのである。絶対的存在者のみか知識と知恵が等しくなる。こうして、知識は知恵の発揮に必要であり、知恵による成功は、次回の知識として残る。知恵によって知識を獲得し、知識によって知恵が有効に働く。ここに知識と知恵の循環が生じる。この循環において、主体の意志により感性、理性、知性の調和が求められ、維持されてきたのである。ところが、デジタル技術の進展に

よりこの循環と調和が崩れてきた。次節では、この点について議論する。

### 3. 知識の増大における知恵の役割

現代社会は、情報処理技術が急速に進み、多種多様な知識が瞬時に獲得できる。現実的対応が既存の知識のみで対処できるのであれば知恵はいらない。しかし、全知ならざるものにとって、知識の増加は、選択肢が増えることであり、多様な判断が可能になるだけでなく、判断の基準が複雑になる。知識の量が増加すると知識間の関係は累乗的に増加する。これらの諸知識と知識間の諸関係を使いこなすには、それに対応する知恵が必要とされる。知識の増大は、知恵の質的向上を要請する。知識の爆発に人はどこまで耐えられるのだろうか。すでに、相当な部分で機械に頼らざるを得なくなっている。知識のみで対応できる分野は機械化が進む。自動車の自動運転も現実化してきている。かつては、機械にはできない複雑な判断を人間が補ってきた。ところが、現代では人間の未熟な部分を機械が補っている。さらに人間が不要なものとされるに至る。機械でできることは、機械に任せたいほうが確実である。すべての車が自動運転になり、歩行者が携帯端末で位置を正確に発信するならば、交通事故は激減するであろう。すべての医療カルテが、データベースで管理されるならば、最適な検査と治療が機械により指示されるであろう。多くのことが、人の判断より機械の判断が正確であると認識されたならば、専門家の意味も失われかねない。

はたして、新たな状況に機械はどこまで対応できるのであろうか。最終的には、幸福追求という人間本来の欲求を充たす為には人間の知恵の出番が残されているのではないだろうか。ところが、知恵の発揮は日ごろの訓練が必要である。机上の学習では習得できない。機械が予想するのは過去の経験と可能性の延長である。想定されるのであれば機械に対処させたほうが確実である。今後の発生する異変に耐えられる知恵をいかに訓練できるであろうか。知識の増加の応じて、知恵の能力も強化が求められる。それにもかかわらず、実際に活用する機会が減少し、知恵の能力は低下する。人間の知恵を活用できる分野は何が残るのだろうか。おそらく意志の自由に関するのではないだろうか。人類を滅亡から救う知恵。幸福追求の知恵。さらに、芸術や空想の世界へと続く。

### 4. 結語と課題

人は、様々な目的で知識を拡大してきた。本稿では、知識の活用の能力としての知恵について考察を行った。知識と知恵は互いに循環し、その中で、理性、知性、感性の調和が求められてきたのである。本稿はそのような知の構成を提唱するものである。そのような観点から現代をみると、デジタル技術の進展により、知恵の活用の能力の衰退が予想される。それは、ワープロによる漢字の忘却、電卓による計算能力の低下に留まらず、人間の知性そのものの低下が予測される。それほど、昨今のデジタル技術には目を見張るものがある。その為に、一層の主体の自由ま意志と自律が求められるであろう。

本稿では、近代初期までの思想について検討した。今後、デカルト以降の思想が、知性をどのように捉えたかを論じる必要がある。さらに現代科学の到達した生物学的知見、特に脳科学や心理学の知見を検討すべきであろう。その先に専門と日常との対話が生まれてくると予想している。

## 文献

古代文献については、原書出版年不明の為、文中表記は書名を記した。慣例によりプラトンはステファヌス版、アリストテレスはベッカー版のページとした。

- アリストテレス (Αριστοτέλης; B.C.384-322). 1971年. 『ニコマコス倫理学 (上)』(高田二郎訳). 岩波書店 [文庫]  
(原書名: *Ηθικά Νικομάχεια*)
- . 1968年. 「形而上学」『アリストテレス全集第12巻』(出隆訳). 岩波書店 (原書名: *Μεταφυσικά*)
- エルラー, ミヒャエル (Erler, Michael; 1953-). 2015年. 『知の教科書 プラトン』(三嶋輝夫・田中伸司・高橋雅人・茶谷直人訳) 講談社. (原書名: *PLATON*. 2006)
- ガリレイ, ガリレオ (Galilei, Galileo; 1564-1642). 1959年. 『天文対話』(青木靖三訳). 岩波書店 [文庫]. (原書名: *Dialogo*. 1632)
- ケプラー, ヨハネス (Kepler, Johannes; 1571-1630). 2009年『宇宙の調和』(岸本良彦訳). 工作社. (原書名: *Harmonices Mundi*. 1619)
- コペルニクス, ニコラウス (Copernicus Nicolaus; 1473-1543). 1953年. 『天体の回転について』(矢島祐俊訳). 岩波書店 [文庫] (原書名: *De revolutionibus orbium coelestium*. 1543)
- 塚田富治. 1999年. 『ベーコン』 研究社.
- デカルト, ルネ (Descartes, René; 1596-1650). 1976年. 『方法序説』(落合太郎訳) 岩波書店 [文庫] (原書名: *Discours de Laméthod*, 1637)
- 南雲功. 2017a. 「知恵の研究試論」『生活科学研究』(文教大学生生活科学研究所) 第39集 2017年, pp.287-292
- . 2017b. 「技術哲学試論 (v.4)」『宗教研究』(慶應宗教研究会) 第30集 2017年 pp.82-91
- . 2017c. 「主体的技術哲学試論」(学位論文 [修士学術]-放送大学, 2017年
- ニュートン, アイザック (Newton, Sir Isaac; 1642-1727). 1971年. 『自然哲学の数学的諸原理』(河辺六男責任編集). 中央公論社. (原書名: *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*. 1686)
- 藤沢令夫編. 1978年. 「プラトン全集別巻 総索引」 岩波書店
- プラトン (Πλάτων; B.C.427-347). 1975年. 「ソクラテスの弁明」『プラトン全集第1巻』(田中美智太郎訳). 岩波書店. (原書名: *Απολογία Σωκράτους*)
- . 1975年. 「カルミデス」『プラトン全集第7巻』(山野耕治訳). 岩波書店. (原書名: *Χαρμίδης*)
- . 1976年. 「ソピステス」『プラトン全集第3巻』(藤沢令夫訳). 岩波書店. (原書名: *Σοφιστής*)
- . 1976年. 「ピレボス」『プラトン全集第3巻』(藤沢令夫訳). 岩波書店. (原書名: *Φίληβος*)
- ベーコン, フランシス (Barcon, Francis; 1561-1626). 1978年. 『ノヴム・オルガヌス』(桂寿一訳) 岩波書店 [文庫]. (原書名: *Novum Organum*. 1620)
- 村田純一. 2009年. 『技術の哲学』 岩波書店